

第9回報告書

[笠井淳吾](#)

ワシントン大学(シアトル)でコンピュータサイエンスのPhDを2018年の9月から始めた笠井淳吾と申します。研究分野としては、自然言語処理(NLP)、機械学習に取り組んでいます。

1. 生活、進捗

PhD4年目の後半を迎え、前半から引き続き、ワシントン大学と並行して、[Allen Institute for AI \(AI2\)](#)でのパートタイムでの仕事を続けました。研究内容としては、引き続き言語生成技術に取り組みました。今話題で、研究に限らずアプリなどでも幅広く使われている[GPT-3](#)も、大規模な言語生成技術の一つです。今までは、言語生成モデルの効率化や、科学的な評価方法について研究してきましたが、今回は主にいかに既存のモデルを組み合わせてより良い言語生成を行うかを、研究テーマとして取り組みました。様々な大学や、企業が言語モデルや機械翻訳モデルを作る上で、そのような既存のモデルを、比較的軽量な計算で組み合わせるアルゴリズムを提案しました。例としては、医学分野を専門とする翻訳モデルを、Google翻訳のような一般的な翻訳モデルと組み合わせるような実験、評価を行いました。同じ言語生成ではありますが、今までとは少し違った切り口で、また一つ引き出しが増えたと感じています。

AI2では、引き続き[坂口さん](#)との研究を続けました。坂口さんは、今年の7月から東北大学の准教授に就任されることになり、日本に帰国されました。毎日雑談や研究の話で盛り上がり、大変楽しい時間を過ごしました。坂口さんと論文を書くときは、読者の目の動線や、図や言葉の表現の細かい部分などにも気を配り議論しました。このような経験を通して、論文執筆だけでなく、研究発表の仕方や、物事の見方が変わりました。シアトルから移動されてしまったのは非常に残念ですが、坂口さんのキャリアにとっても、また私自身の成長にとっても、間違いなくプラスな変化だと考えています。今後も継続して協働し、さらに引き出しを増やしていきたいです。

2. PhD生活の振り返り

General examination (thesis proposal) を8月に終える予定で、その後残すところは dissertation defense だけになりました。来年は、アメリカのアカデミア教授職の Job Market に出る予定です。焦らず、楽しんで準備を進めようと思います。

3. 余談

皆さんお待ちかね、前回に引き続きまた一つ韓ドラを紹介しようと思ったのですが、今回は原点回帰といきます。『[白い巨塔](#)』(2003年版フジテレビ開局45周年記念ドラマ、“唐沢寿明バージョン”)について少しだけ語りたと思います。小学生の頃リアルタイムで見てから、一話10回以上は見返していて、メンターの坂口さんとも何度となく語り合い、大変盛り上がりました。やはり本当の名作は、時代や世代を越え、国境を越えて(中国でも、白色巨塔として人気を博しました)愛されるものなのだと、痛感します。我々研究に携わる人間も、国際会議ごとに論文を出すことも大切ですが、常に突き詰めて、現段階での最高の作品を作れるよう、努力していかなければならないと感じます。

小学生当時は、真っ直ぐで患者思いの里見に心を動かされました。しかし、現在は財前に対する、尊敬、憧れの気持ちで溢れています。財前は、常に真っ直ぐで、不器用ではありますが、潔く、素晴らしい医師であり、人間であると思います。財前は断固たる意志に従った行動を後悔したり、(里見をはじめ)他人を責めたりは決してしません。常に前を向き、白い巨塔の上を見上げ、また里見を尊敬し一途に想う姿勢は、ただただ尊いです。そんな彼だからこそ、周りの支えにも恵まれ、短い生涯を美しく生き抜けたのだと思います。

財前が教授になる前も、なった後も、好きなシーンを挙げればキリがないですが、やはり現在の私にも重なる点からも、前半に惹かれます。特に素晴らしいと思うシーンは、第七話の終わりにかけて、財前が真夜中に病院に立ち寄り、若い研修医二人に、“君ら、同期だったな。なんで医者になった。”ときくシーンです。その後白い巨塔の上を見上げるシーン、上に上がっていくカメラワークに繋がっていきます。夜

のひっそりとした病院で、アメージンググレースをバックに、” なんて医者になった” は流石にずるいです。財前自身が二人を自分と里見に重ね合わせて、自分に問いかけているようです。私も将来、” なんて研究者になった” と真夜中の大学で後輩研究者にきいてみたいです。